

赤レンガをいかす会（市川）

No.12

2026年2月25日発行



赤レンガ通信

〒272-0834 千葉県市川市国分 7-12-5

(いちかわ市民文化ネットワーク内)

TEL 047-369-7522

Eメール redbrick.ichikawa@gmail.com

ホームページ <https://ichibun.net/akarenga/>

会の運営は、皆さんの会費
(年 2000 円)・カンパで支え
られています。



HP リンク

特集 シンポジウム『赤レンガを活かした国府台のまちづくり』と赤レンガ見学会

目次	赤レンガ見学会 高木彬夫・・・P 1		質疑応答・ディスカッション 榎戸敬介・・・P 4
	基調講演 西村幸夫・・・P 2		新春シンポジウムを振り返って・・・P 4
	話題提供 1 金指有里佳・・・P 2		参加者アンケートより・・・P 5
	話題提供 2 穎原澄子・・・P 3		Facebook 投稿より 原田良博・・・P 6
	話題提供 3 岡直樹・・・P 3		会のこれから 吉原廣・・・P 6

2026年1月10日(土)、和洋女子大学にて、赤レンガをいかす会主催の新春シンポジウム『赤レンガを活かした国府台のまちづくり』と赤レンガ建築物の見学会が開催され、80名近くの参加者がありました。

当日の様子を、企画を担当した高木彬夫共同代表、シンポジウムの総合司会の榎戸敬介千葉商科大学総合政策部教授、話題提供を行った金指有里佳和洋女子大学家政学部助教に、レポートしていただきました。



赤レンガ見学会 筑波大学附属聴覚特別支援学校のグラウンドから外観を

◆ 高木彬夫（共同代表） ◆

2020年に赤レンガの見学会とシンポジウムを生み合わせて赤煉瓦ネットワーク全国大会を開くため準備を始めたが、コロナの流行が始まり止むなく計画を延期していた。

その後の5年間に情勢が変わり、長年閉鎖したままの赤レンガ建築物と血清研究所跡地の所有者である千葉県は、赤レンガを除く戦後に建てた施設全てを解体撤去することに決定した。そのため安全確保に問題があるとの理由で、敷地内に入ることが許可されなくなった。



市民の間には赤レンガの実物を見たいという要望が多く、担当者としてはそれに応えたかった。そこで、シンポジウムに先立って、隣地の筑波大学附属聴覚特別支援学校のグラウンドから外観のみ眺め、内部の写真を含め過去の見学会などを記録した映像をシンポ会場で映写しこれに替えた。

* 筑波大学附属聴覚特別支援学校には特別のご配慮をいただき感謝申し上げます。

基調講演 西村幸夫 国学院大学観光まちづくり学部教授・学部長からの大きな示唆

◆榎戸敬介（千葉商科大学総合政策部教授）◆

本シンポジウムの開催にあたり、主催者である赤レンガをいかす会共同代表の高木彬夫氏から、シンポジウムの目的と意義について説明がなされた。

次いで、国学院大学観光まちづくり学部学教授・学部長の西村幸夫先生により基調講演「これからのまちづくりと赤煉瓦」が行われた。国府台の歴史・地理の解説、歴史的建造物保存の重要性、そして近年の事例紹介まで、国府台の赤レンガ建物について考えるための枠組みについてご講話いただいた。お話しの中で、全国に所在する国府のほとんどは現在では廃れており、市川国府台のように現在も良好な居住地区となっているのは例外的であること、そして松戸街道のように国府時代の幹線道路が現在も同じ道筋で使用されている例はさらに珍しいこと、という指摘がなされた。

このような国府台の過去と現在のつながりについての指摘は、本地区での赤レンガ建物という歴史的建造物の保存の意義について改めて確認することとなった。また、舞鶴赤れんがパークの事例紹介では行政の関わり方の重要性が示され、国府台での今後の展開に大きな示唆をいただいた。



◆高木彬夫◆

西村先生は、市川全体の地形の変化と居住地域の変遷を、地形図、陸軍測量図、迅速地図等の比較から説き起こし各時代の史実から、国府台の過去から現代の市川国府台の姿を浮き彫りにされた。国府所在地が町として遺っている数少ない例として国府台がある。



私にとって特に興味深い話題として横浜と舞鶴の間で起こった「赤煉瓦ネットワーク」という活動の歴史についてであった。横浜に遺る煉瓦倉庫の活用を探っていた横浜市の職員が、舞鶴市の海軍基地に遺る煉瓦造建築群の保存を手掛けていた舞鶴市の職員と連絡を取り合った結果、「赤煉瓦ネットワーク」というグループを作り活動を開始したことにある。

第一回赤煉瓦シンポジウム IN まいづる（1990）（基調講演西村幸夫先生）リーダーであった当時の舞鶴市の職員矢谷明也さんも、今日のシンポジウムにはるばる舞鶴から参加された。

話題提供 1 金指有里佳 和洋女子大学家政学部助教 赤レンガをいかす会と大学連携

◆榎戸敬介◆

基調講演に次いで、和洋女子大学家政学部の金指（かなざし）有里佳助教、千葉大学大学院工学研究院の穎原（えばら）澄子教授、そして船橋の一般社団法人地域力研究所の岡直樹代表理事から話題提供がなされた。

金指先生からは、「市民活動団体（赤レンガをいかす会）と大学・学生との連携について」の演題で、これまでの赤レンガ建物の調査の経緯についての紹介がなされた。市民活動団体としての赤レンガをいかす会およびその若手グループとしての赤レンガをいかす会ユース部の活動に、和洋女子大学と千葉商科大学が教員およびゼミ単位で関わるようになった経緯、見学会やワークショップなどこれまでの協働の成果についての紹介があった。市民とともに二つの大学の教員・学生が協働で赤レンガ建物の保存・再利用について取り組んでいる状況について参加者の関心を集めた。

◆ 金指有里佳（和洋女子大学家政学部助教） ◆

初めに、和洋女子大学家政学部家政福祉学科金指有里佳助教より、赤レンガをいかす会・千葉商科大学・和洋女子大学が連携して行っている市川国府台赤レンガをテーマとしたまちづくり活動について、話題提供を行った。

市川市立図書館等でのパネル展覧会、国府台地域を巡るフィールドワーク、赤レンガ活用案ワークショップ、赤レンガ現地調査等、2022年度から連携し実施してきた取り組みを紹介した。

連携の成果として、学生が多様な学びを得られることや国府台地域のコミュニティが広がったことなどを挙げ、また、今後の活動に関する検討課題について説明した。



話題提供 2 穎原澄子 千葉大学大学院工学研究院教授 記憶と歴史をつなぐ場所

◆ 金指有里佳 ◆

次に、千葉大学大学院工学研究院教授の穎原澄子氏より、「三里塚教会における活動—記憶と歴史をつなぐ場所としての歴史的建造物—」について話題提供が行われた。

成田市にある三里塚教会は、建築家吉村順三が設計した唯一の教会建築で、1954年に竣工した木造のキリスト教の教会である。2024年にはキャンドルナイトのイベントを開催し、教会の歴史および吉村順三の建築に関する講演会も教会内で行われたことが報告された。当教会は、成田空港建設反対運動に関わった戸村一作氏が深く関係していることなども説明され、2025年に三里塚コミュニティセンターにおいて芸術家でもあった戸村氏の作品等を展示したこと、また教会において同氏に関わる講演会も行われたことが報告された。



歴史をつなぎ、地域の活動の場、拠り所となることを願い、その可能性について言及した。

◆ 榎戸敬介 ◆

千葉大学穎原先生からは、歴史的建築物の保存をテーマに、三里塚教会の保存・修復の経緯と現在の状況について紹介があった。日本を代表する建築家のひとりである吉村順三が設計した唯一の宗教施設としての価値の継承の意義とともに、同大学の学生発案によるキャンドルナイトによる現代的な利用の試みが紹介された。三里塚教会が残されたことで結果的に同地域の様々な歴史が建物に結び付けられて語られることになり、小さな建物であっても建築的価値だけでなく地域の記憶の継承という点でそれが残されることの意義が示された。

話題提供 3 岡直樹 一般社団法人地域力研究所代表理事 民間図書館の展開

◆ 榎戸敬介 ◆

最後に、地域力研究所の岡直樹氏からは、「全国に広がる民間図書館」として、小規模の民間図書館の試みを全国展開につなげていった事業プロセスの紹介がなされた。街中の小さな空間を利用して寄付された書籍をもとに始めた図書館の運営が、最近では大手マンションディベロッパーからも価値ある空間利用ということでマンション内での図書館の運用を受託、あるいは空き家を利用した図書館の運営、という多様な展開が紹介された。

赤レンガ建物の利用方法についてこれまで検討されていなかったテーマが提示されることとなった。



◆ 金指有里佳 ◆

岡直樹氏は、「全国に広がる民間図書館」について話題提供を行った。

岡氏は、本棚さえあればわずかなスペースでも図書館をつくることができる、として全国に民間図書館を展開し、手掛けた数は全国140カ所にのぼる。NPO法人を立ち上げ、船橋駅前の空間を活用した事例から始まり、商店街の空き店舗や大規模マンションの共有スペースを活用した事例など、多様な民間図書館を生み出

していることが説明された。他にも、空き家再生の取り組みとして、戸建住宅の空き家を活用して民間図書館を開設した事例およびプロセスなどが紹介された。

また、障害福祉事業を行う株式会社も立ち上げ、戸建住宅の空き家をリノベーションして開設した事業所において本の流通に関わる就労支援に取り組んでいることも紹介された。

質疑応答・ディスカッション 新しい考えの共有と議論の深まり

◆ 榎戸敬介 ◆

話題提供の後、会場からの質問やコメントも活発になされ、新しい情報や考え方が共有されるとともに、これまでのワークショップや勉強会での議論をさらに深めるシンポジウムとなった。

最後に高木氏から保存・再利用を実現するためには、より広範な人々の参加が不可欠であることが提唱され、今後の展開に向けて市民の幅広い参加が呼びかけられた。また、国府台地区を超えたより広い地域に関わる歴史的資源としての赤レンガ建物の価値を市川市民で共有していくことが必要であるとの考えが示された。



新春シンポジウムを振り返って 榎戸敬介・金指有里佳・高木彬夫

◆ 榎戸敬介 ◆

今回のシンポジウムでは、国府台赤レンガ建物についてこれまでになく多角的な視点から考えることの重要性が示された。また、参加者の熱心な姿勢から、あらためて市民レベルでの同建物の保存・再利用への関心の高さが示されることとなった。

今後は、シンポジウムの成果をもとに、国府台そして市川のまちづくり資源として国府台赤レンガ建物の保存・再利用を市民プロジェクトとして進めていくことが必要であり、市川市との協働をどのように進めていけるかが課題であることが確認された。

◆ 金指有里佳 ◆

市民の皆様には、いかす会の活動に興味を持って参加したいと思っていただきたい。その際、地域の大学が関わっていることは大きな強みであり、参加いただくことによって、地域の多世代コミュニティにもつながる。そのコミュニティをもってすれば、今後の見通しも変わっていくのではないかと。

◆高木彬夫◆

話題提供では、和洋女子大金指先生は市民活動グループと大学ゼミとのコラボの現状、千葉大大学院の穎原先生は三里塚にある小さな教会とそれにまつわる歴史を軸に展開しつつあるまちづくりの事例、船橋で事業を展開している岡さんは船橋市の京成電車駅前通路に本棚一つを置き誰でも借りられる私設図書館からスタートして、今は全国に140カ所に増やしかつそこから収益も上げられる事業化した事例が話された。

これら三者の実体験の話題を発表していただくことは、坩堝（るつぼ）の中で化学反応を起こすことを期待して企画したものである。三人の方々が快諾して下さったことは、まさに国府台のゲニウスロキ（地霊）のなせる業と感じた。参加者の皆さんからは「具体的な話が面白かった」「参考にしたい」などの反響があった。

私達はこのチャンスを活かして、長年温めてきた「何か」の実現のために動き出したいと思う。

『戦争という破壊行為に対して創造(歴史・文化、人間関係、環境)をテーマにした場を作りたい』という、いかす会設立当初からの目的を実現したい。

歴史を下敷きに夢を描く、新しい歴史を創り出す活動、「何を創るか=What」と同時に「どう創るか=How」のヒントを得られたと思う。

参加の皆さんが残してくれた感想もいかす会の活動を認め、さらに応援するという声が多く主催者として大変勇気づけられる。

赤レンガをいかす会が15年にわたる活動を続けて来て、当初の勢いが衰える前に今回のシンポが開けたことを意味あることにしたい。新しいステージに向かう勇気を貰うことができ、さらに大きな活動に繋げて行きたいと強く思った。

諸般の事情で開催日が入学試験のシーズンに真ただ中、それに連休と重なったため若者の参加が少なかったのは致し方ないこと、次回の集まりにはそういったことを含めて企画したいと考えます。

催しの実施にご協力いただいた関係者、関係校の皆さま、ゼミの皆さんに心より感謝いたします。

参加者アンケートより 多様な意見と構想イメージの広がり

- ・国府台に残る赤レンガ建築を活かした街づくりの取組が市川の地域の人にこんなにも認知されているということに感動。(市川市の地域に対する熱量に!) どういった取組を行っているのか報告会だけでなく、別の事例(三里塚教会、図書館)もみせることで構想イメージが広がり、地域の人々の意見も出やすくなるとても意義のあるシンポジウムだと感じました。いかす会の取り組みを、今後の研究室・活動でも参考にさせていただこうと思います。
- ・文化財、地域資源を活用したまちづくりのお話とても興味深かったです。また、大学(若い人達とのかかわり、教員、研究)が関係していることが大きな力になると思いました。
- ・それぞれの講演内容が興味深く楽しく聞くことができました。それから、ディスカッションの質問者が多様で、いい意見があったこと、これは生かす会の皆様の13年間の大きな成果であると思いました。
- ・どの方のお話もとても興味深くうかがえました。文化事業としてだけでなく、重層支援の予算も組めるよう、いろいろな人が集える”場”となるように。”行政を国府台を結ぶ”ことで他の地域を置き去りにしないで。
- ・今回のシンポジウムに行政の方がいたら、別の視点から、意見があったのではないかと。地域行政と一緒に進んでいった方が良いと思いました。
- ・アクセスの悪さなど課題の多さが分かりました。解体工事が進み、具体的な活用に期待したいし参画したい。国府の町も含めて市川の街を盛り上げたい。

- ・国土交通省の「かわまちづくり」の制度を使って、にぎわい創出をすると良いのでは。国土交通省の「歴史まちづくり」の制度を伝えて、国府の再現をしてみませんか？ 国土交通省の「防災まちづくり」の制度を使って、防災拠点を造成してみたいですか？
- ・3歳の時から市川に住んでいますが、大人になるにつれて市川の「軍都」としての歴史に目が向くようになり、学ばなければいけないことがたくさんあると感じています。まちづくりについては全く知らないことばかりでしたので、戦争遺構から平和のメッセージを、という視点以外にも今日は新たなトピックについてのお話をたくさんうかがうことができ、イメージが広がりました。

Facebook 投稿より 原田良博さん（市川街歩きの会主催） 行徳舟運復活とつなぐ

昨日は、和洋女子大学さんで赤レンガをいかす会のシンポジウムに参加して参りました。シンポジウムの前に筑波大学附属聴覚特別支援学校の敷地に入れて頂き遠めから赤レンガ倉庫をみてきました。柵越しからしか見られなく上手く写真が撮れなかったので、1枚目の写真は資料からあげました。

さて、旧血清研究所内に遺っている赤レンガ武器庫を歴史的重要建築として保存し、同時に活用する事を目的にして会が発足されたそうです。現在旧血清研究所は千葉県が管理しているそうですが、2025年に旧血清研究所の建物を赤レンガ棟を残して全て解体撤去する方針になったようです。これにより、赤レンガ棟だけになるので、「何か」の実現の為に動きはじめられるようです。皆さんはどの様にいかせられると思いますでしょうか？

因みに、私は行徳の舟運復活の活動もあるようですから、その船を国府台迄伸ばして、赤レンガそのものの活用法は別として、赤レンガだけでなく国分寺や弘法寺その他の歴史建造物に行けるような構想もありかなと思いました。

『千葉日報』2026年1月8日付に「赤レンガ建物活用へシンポジウム10日、貴重な現地見学会も 市川の戦争遺跡」として取材記事が掲載されました。（ホームページでご覧いただけます）

会のこれから 建物の歴史から言えば十余年は微々たるもの

◆ 吉原廣（共同代表） ◆

21世紀の始め、初めて赤レンガ武器庫なる建物を前に、その歴史を思い浮かべてなんとも感慨深く、またかつては隣にも別棟があったと聞き興奮したものだ。「赤レンガをいかす会」は市民に広く知ってもらおうと見学会を実施してきたが、これが中止となってからは何とも動きが鈍くなり、保存活動の難しさを実感してきた。とはいえ、我々の動きもまだ十余年。建物の歴史から言えば微々たるもの。諦めることなく保存再生を訴えていきたい。皆様のご支援をお願いします。

● 令和8年2月市川市議会定例会
石原よしのり議員（新しい流れ）
赤レンガについて一般質問します
○「赤レンガ建造物について」
保存、活用問題の進展
2026年3月6日（金）13時～
市川市役所第1庁舎7階（傍聴席）
インターネットライブ中継もあり

📖 『放置と崩壊の危機にある
「市川国府台の赤レンガ建築物」
～その保存と活用を求めて～』
赤レンガ建築物の「必携ガイド」と
もいべき冊子はお持ちですか？
A5版 120ページ 2015年11月発行
500円+送料210円

編集後記

赤レンガをいかす会は、NPO法人いちかわ市民文化ネットワークが事務的支援をしています。ホームページ、SNSの発信のお手伝いをしているなかで、今回の通信の発行を企画しました。（根岸英之）